

第2章 子どもが主人公！日本各地のあまんじゃく昔話②

とびふこう ◆ 鳶不孝



【あらすじ】

“むかし、あるところに、とんびの親子がおったそうな。

子とんびはヘソ曲りの子であったと。

親が、「山へ行け」と、言えば海へ行き、「海へ行け」と、言えば山へ行く。

「今日の食べ物おいしい」と、言えば「まずい」と、言って、いつもあべこべばかりしていたそうな。

そのうち、親とんびが、重い病にかかって死にそうになった。

「はあて、おらはもうじき死ぬ。死んだらば山に埋めてもらいたいが、あの子は何でもあべこべにする子だからなあ」

こう思った親とんびは、子とんびをそばに呼んで、

「おらが死んだら、海へ投げこんでおくれ」と、ゆいごんして死んでいった。

さて、死なれてみて、はじめて親のありがたさが分かるようになった子とんびは、

「ああ、おら、親が生きとるうちは、ぎゃくばかり言ってさんざんこまらせたなあ。せめて、最後のたのみだけはきいてやろう」と、言って、言いつけどおり親を海へほうりこんだ。

ところが、親が、年がら年中海で水びたしになっているかと思うと、かなしくてたまらない。

子とんびは、泣き泣き暮らしているうちに、

「そうか、山の静かなところへ埋めて欲しかったんだ。きっとそうだ」と、ようやく気がついた。

「海が引いたら親を拾ってきて、今度は山へ埋めよう」そう思ってな。

海の水早よ引け

早よ引け

うみん ひいよひょう

うみん ひいよひょう

と、鳴きながら、今でも親をしたって捜しまわっているのだそうな。”

(フジパン.民話の部屋. <https://minwa.fujipan.co.jp/area/shizuoka>.(参照 2021-7-04)より引用)

【解説・コメント】

- 1 この「鳶不孝」も動物昔話に分類される話です。前出の「あまがえるふこう雨蛙不孝」と同じように、広島市佐伯区の「あまんじゃく伝説」と多くの類似点があります。
- 2 一方で、「鳶不孝」では
 - ①鳶の親子の話しであること。
 - ②子とんびは最後に親とんびの真意に気づき、「海の水が引いたら親を拾って、山に埋めよう」と決意する。というところが「あまんじゃく伝説」と異なります。
- 3 上記で紹介した「鳶不孝」は鳶の親子の話ですが、「雨蛙不孝」と同じように、前世はあまんじゃくな人間の子が、鳶に生まれ変わった後に親の墓を心配し続けるという昔話もあるようです。
- 4 「鳶」や「雨蛙」に限らず、日本各地には、鹿児島県の「夕鳥」、岩手県の「尾長鳥」、石川県の「鳩」、滋賀県の「かっこう」など、他の動物を主人公にした、あまんじゃくな動物昔話はたくさんあります。いずれも、雨が降ると親の墓が流されないか、心配して鳴くという話です。関心のある方は、『日本昔話通観』（同朋舎）を読んでみてください。



オナガ



カッコウ